「オンライン版　大河内文庫　大河内一男関係資料」解題

武田知己（大東文化大学）
金子貴純（大阪成蹊大学）

「オンライン版　大河内文庫　大河内一男関係資料」（以下、「オンライン版　大河内一男関係資料」）は、東京大学経済学部で長く経済学・社会政策を講じ、その生涯で、戦前・戦後の様々な審議会・研究会等に積極的に携わった大河内一男（おおこうち・かずお　1905―1984。以下敬称略）が残した一連の資料（「大河内文庫　書籍の部・原史料の部」大東文化大学図書館所蔵）から、研究の過程で収集したと推測される史料と国の政治・行政、そして外交に影響を与えた諸組織や団体の関係資料及び労働問題や組合問題に関連する各種資料、そしてそれらに関連した大河内自身のメモで構成されるコレクションである。後述の通り、書籍の部にも一次史料が混在しており、その中からも貴重なものを採録したこと、またそもそも原史料の部自体が大部であるので、どうしても収録を断念しなければならないものが残った。収録した史料は戦前・戦時の史料を「戦前・戦時期資料」とくくり、「戦後資料」との二期に分類し、分量の関係から三部に分割して本コレクションとした。

1. 史料の来歴

そもそも、「オンライン版　大河内一男関係資料」の元となった大河内の書籍と原史料が、なぜ大東文化大学にあり、どのように整理され、今日に至ったのであろうか。受け入れの経緯については、2015 年 7 月 31 日に同大学図書館主催で「大東文化大学合同研究会」が開催され、仲介者の大杉由香、当時の図書館長であった柴田善雅（以下、すべて肩書、敬称を省略する）による受け入れの経緯に関する回想がある。整理の経緯については、主として整理に当たった金子貴純「近現代史の人物資料情報　大河内一男」（『日本歴史』第 891 号、吉川弘文館、2022 年）、また確認作業に当たった武田との共著で、武田知己・金子貴純「はじめに　目録掲載に当たって（１）」「資料紹介　大東文化大学図書館「大河内文庫」原史料の部　仮目録第一部（１）」（『大東法学』第 32 巻第 1 号、2022 年 12 月）がある。

金子は、その後も一部の整理を継続した。その過程を含めてここに受け入れと整理の概要を述べれば、一男の令息故大河内暁男が大東文化大学経営学部に着任されたことが縁となり、2008 年に父一男と妻昭子の旧蔵資料も含めた旧蔵書寄贈の申し出があった。2009-2011 年にかけてすべての蔵書類が搬入され、整理が続けられた（なお、東京大学経済学図書館にも、大河内の原史料が所蔵されている。その一部は、J-DAC の「戦後社会保障制度関係資料」として収められているが、筆者たちは、同学部に収められた大河内資料の全貌を、この解題執筆時点で把握できていない）。その過程で段階的に、まずは書籍として登録できるものが優先して整理された（第一次整理）。2012 年には図書に関しては整理がほぼ終わり、3 冊の『大河内文庫目録』Ⅰ-1、I-2 ・Ⅱ（大東文化大学図書館、2013 年）が、冊子版と CD

版の両方で発刊された。大河内文庫は和書 14666 冊、洋書 3763 冊、和装本 151 冊で構成されている（ただし、戦前・戦後の労働、戦後の社会保障関連の一次史料もこの中に含まれている。背表紙が一センチ程度のものは書籍として分類したためである）。この目録は、他の図書館や研究所等にも配布されているし、大東文化大学図書館の OPAC にも登録されている。

ところで、その整理の過程では、整理に当たった同大学図書館職員（長田幸枝、鶴田香織、故山本彰等）によって、図書整理の際によく捨てられがちなバラバラの書類を意識的に整理する方針がとられた。業務の合間に行われた作業であったため、大くくりの整理であったが、この方針は、結果、図書に分類されない貴重な原史料が捨てられずに残った大きな理由となった。

書籍の部の整理がひと段落した 2013 年ごろから書類の整理が本格的に進められ、2014 年 4 月、図書館の依頼を受け、日本政治外交史を専攻する武田と当時武田の指導下で研究していた金子が、一点一点を採録する第二次整理を開始した。その全体は書類箱 204 箱、3401 点となった。その後、図書館で別置されていた原史料の整理（第三次整理）を金子が行った。その成果は、53 箱 421 点である。結果、大河内文庫原史料の部の総数は、257 箱 3822 点となった。このうち、第二次整理までの目録は、武田知己・金子貴純「大東文化大学図書館「大河内文庫」原史料の部仮目録（１）―（６）」（『大東法学』第 32 巻第 1 号 - 第 34 巻第 2 号、2022 - 2025 年）としてまとめられた。

この原史料の部の内容については、前述の「大東文化大学合同研究会」で、兼田麗子、萩原稔、吉永圭、そして武田・金子がそれぞれの専門の立場から内容の一部を紹介している。また、この研究会では石井寛治による大河内の短い回想や評価も残された。さらに、大東文化大学図書館の「大河内文庫」に、陸軍の秋丸次朗のインテリジェンス機関、いわゆる秋丸機関の報告書（『英米合作経済抗戦力調査』など）が保管されていることが判明し、一部は牧野邦昭編『「秋丸機関」関係資料集成』（不二出版、2024 年）に採録され、NHK の特集でも取り上げられた。なお、前述の通り、大河内文庫には暁男・昭子のものも含まれている。

2. 大河内一男の生涯

本史料の旧蔵者である大河内一男とはどんな人物なのだろうか。大河内には、弟子筋によるインタビュー記録・大河内一男『社会政策四十年―追憶と意見―』（東京大学出版会、1970 年）があるが、その後、大河内の母校である第三高等学校の創立 110 年記念で行った公開講演をもとに書籍化された『暗い谷間の自伝』（中公新書、1979 年）があり、いずれも終戦までの足跡を追う基本資料となっている。また、『大河内一男集』（全 8 巻、労働旬報社、1980 年–1981 年）にある著作目録はその業績を追う上で役立つ。大河内一男先生還暦記念論文集刊行委員会編の全三冊の論文集（第 1 集『社会政策学の基本問題』、 第 2 集『労働経済と労働運動』、 第 3 集『古典経済学の伝統』、有斐閣、1966 年）や、指導を受けた学生の回想として大河内演習同窓会編『戦前戦後―大河内演習の 25 年』（東京大学出版会、1979

年)、さらに逝去後関係者による回想などを集めた大河内演習同窓会編『わが師　大河内一男』(大河内演習同窓会、1986 年）があり、その業績や人となりを理解する基本資料となっている。

これらによって概要をまとめれば、大河内は、1905 年に東京下谷に生まれ、府立三中に進むころ、ジェーン・オースティンを好み、また厨川白村に影響を受けるなどして、英文学を志して旧制三高に進んだ。その後は自然京都帝国大学への進学を思い描くが、高校でマルクスに出会い、また、京都帝大の河上肇の貧乏物語などの影響もあって（大河内一男「はじめに」『貧乏物語』文芸春秋新社、1959 年。河上の講義録も「オンライン版　大河内一男関係資料」に収められた)、東京帝国大学経済学部に進学し、府立三中の卒業生で先輩であった河合栄治郎の下で経済学を学んだ。1929 年 3 月に同大学を卒業後、4 月に助手となり、研究生活をスタートさせた。

学部生時代の大河内は、経済学部の授業には飽き足らず、また当時のマルクス主義・反マルクス主義の対立、満洲事変以降の軍国主義が進む世相に強い影響を受けた、と回想している。また助手採用後は、1930 年 2 月の入営後の病気などもあり、1932 年に助手から嘱託へ、1935 年に講師となるまで、やや孤独な研究生活を送るが、激しい経済学部内の対立や平賀粛学などの影響を潜り抜けて、頭角を現し、当時を代表する経済学者となった（前掲『社会政策四十年』16‐32 頁)。

大内兵衛によれば、大河内は、平賀粛学後の東大経済学部を代表する四人の筆頭に挙げ得る「大河内理論」を残した（大内兵衛「大河内理論の魅力」『経済学五十年』下、東京大学出版会、1959 年)。では、若き大河内が打ち立てた「大河内理論」とはどのような理論であろうか。そもそも、研究者として、大河内は「社会政策」を研究しようとしていた。本人によれば、研究関心は社会政策の歴史と本質論の解明にあった（前掲『社会政策四十年』、53 頁)。助手時代の終わりに「概念構成を通じて見たる社会政策の変遷」(『経済学論集』第 1 巻第 9 号、第 2 巻第 1 号、1931‐32 年）が出されると、これを大幅に発展させて、1936 年に大著『独逸社会政策思想史』を出版する。大河内は、社会政策を「資本制経済の内的必然性として、とくに生産要素としての人間「労働力」について総体としての資本が行なう合理的手段の体系」（同前、64 頁）ととらえた。このような意識は、表現はともかく、「概念構成を通じて見たる社会政策の変遷」から継続している。「労働保護立法の理論に就て」(『経済学論集』第 3 巻第 11 号、1933 年）が、こうした意識が明確になった時であったという。すなわち、いわば「生産政策」として労働力をとらえたこと、これが大河内理論の大きな特徴であった。大河内理論が別に「生産力理論」と呼ばれる所以はここにある。

また、大河内は、以上の考えをドイツの社会政策思想に求めると同時にマルクスの『資本論』に探った。大内兵衛が、大河内理論を当時としては進歩的であったと評するのはそうした理由からであった。

しかし、大河内理論には左右両方からの批判があった。また、社会政策は分配政策なのか生産政策なのか、また労働政策は経済的な政策なのか社会学的な政策なのか、はたまた大河

内理論は戦争協力の理論であったのか否か、そしてその理論が戦前と戦後にどのように変化し、連続したのかなど、大河内理論をめぐる論争は活発であった。戦前には北岡寿逸、高田保馬などの批判があり、戦後は服部英太郎との論争があった。戦後も数多くの研究で取り上げられた。大河内理論の主要な批判的検討を行った研究としては、高畠通敏 「生産力理論 - 大河内一男・風早八十二」思想の科学研究会『転向 共同研究』中（平凡社、1960 年）、石田雄「マルクス主義以後の社会科学」『日本の社会科学』（東京大学出版会、1984 年）、玉井金吾「日本資本主義論争と社会政策本質論争 ：1930-50 年代の大河内理論をめぐって」（『経済学雑誌』第 90 巻第 3･4 号、1989 年 11 月。のち、『防貧の創造　近代社会政策論研究』啓文社、1992 年所収）、三谷太一郎「戦時体制と戦後体制」『岩波講座 近代日本と植民地』第 8 巻『アジアの冷戦と脱植民地化』（岩波書店、1993 年。のち『近代日本の戦争と政治』岩波書店、1997 年所収）、藤田安一「戦時財政経済政策における「生産力理論」の批判的検討」（『鳥取大学教育学部研究報告：人文社会科学』第 45 巻第 2 号、1994 年 12 月）、山之内靖 「参加と動員-戦時期知識人のプロフィール」『システム社会の現代的位相』（岩波書店、1996 年）などがある。近年も高岡裕之 『総力戦体制と「福祉国家」』（岩波書店、2011 年）などで大河内が取り上げられている。

大河内の戦後の歩みについては、社会保障制度審議会での活躍が知られている。近年の研究に小野太一『戦後日本社会保障の形成：社会保障制度審議会と有識者委員の群像』（東京大学出版会、2022 年）がある。また、大河内が東大紛争時の総長でもあったことも著名であるが、大河内に代わり総長代行となった加藤一郎の補佐を務めた坂本義和は、大河内のリーダーシップに厳しい批判を加えている（坂本義和『人間と国家』下、岩波新書、2011 年、10 頁）。こうした部分的検証や寸評はあるが、大河内の戦後の足跡に関するまとまった研究は管見の限りない。しかも、彼の自伝や多くの回想は、戦前・戦時の大河内のものにとどまっている。今後の研究に俟つほかない状態である。

3. 「オンライン版　大河内一男関係資料」収録資料について

原史料の部には、以上のような大河内の経済学者としての業績に関して参考となると思われる自筆原稿などが残されているが（大杉由香「大河内文庫の学術的特徴について」前掲「大東文化大学合同研究会」PDF で利用可）、「オンライン版　大河内一男関係資料」には、経済学者としての生涯に付随した社会活動の過程で収集した資料と、関係した諸団体の資料を収める方針とした。

一つの史料群は、大正から昭和戦前期にかけての労働問題に関するものである。内務省社会局から協調会、各種商工会などの団体まで種類は数多い。中には菊川忠雄の旧蔵史料があるのが目につく（川村学園女子大学図書館所蔵との泣き別れのものであろう）。また、社会主義・共産主義運動に関連した雑誌・新聞・ビラ類があるが、これは大河内が執筆した日本の社会主義関連の著作執筆の過程で入手したものであろう。管見の限り、これだけの量で保存している機関はなく、すでに失われたものが少なくないと推測される貴重な記録の一部

を収めた。

二つ目に、1930 年代半ばから戦時期にかけての経済団体に関する資料がある。調査研究本部や日本経済連盟会、中央物価統制協力会、産業報国会などで、多くが前掲『社会政策四十年』の回想でも触れられている。

これに対し、より政治性の強い団体の記録も含まれている。昭和研究会、国策研究会、海軍（調査課、大学校、末次信正の私的研究会）、外務省、大東亜省などであるが、これらは『社会政策四十年』にはほぼ言及がない。こうした団体との関係の多くは、矢部貞治とのかかわりから生まれたことが、『矢部貞治日記　銀杏の巻』（読売新聞社、1974 年）から示唆される。同日記によれば、両者はしばしばコーヒーや食事を共にする関係でもあって、この時期の両者の関係は極めて近い。J-DAC の矢部貞治のコレクションと本コレクションの重複があるのはそのためである。こうした大河内と戦争とのかかわりについては、個別の団体別に研究されている。有馬学「戦時労働政策の思想：昭和研究会労働問題研究会を中心に」（『史淵』第 120 輯、1983 年）はそうした大河内研究の嚆矢であった。海軍については、調査課と大学校、また末次の私的研究会との区別がなされたものは管見の限り見当たらないが、伊藤隆編『高木惣吉　日記と情報』（みすず書房、2000 年）の解題、またかつて大東文化大学東洋研究所には調査課の史料が所蔵されており（現在はアジア研究所に移管されている）、その編纂に当たった兵頭徹「海軍省調査課と嘱託の役割」（『東洋研究』に 2005 年より 2011 年まで 7 回にわたり連載）などが基本的論考である。

しかし、同じく回想録などではあまり言及のない、台湾・朝鮮などの植民地関連史料、戦時経済特別調査室関連など、矢部貞治との関係を超えた史料も残されている。

また、戦時期の史料中に、ベヴァリッジ報告書に関する厚生省の資料がある。よく知られているが、戦時期に日本はイギリス型の福祉国家に関心を示していたが、大河内は日本で最初にその記録に接した人物となった。これも大変貴重なものである（東京大学経済学部にも関連資料があるようである。菅沼隆「「ベヴァリッジ報告書」の「渡来」と大河内一男」『東京大学経済学部資料室年報（7）』2017 年、30-41 頁）。

以上は、『社会政策四十年』『暗い谷間の自伝』の記述を補足かつ補正する記録であり、それまでの大河内の足跡や業績の評価の再検討を可能にするものである。総括的な論考も可能であろう。

戦後資料にも興味深いものが少なくない。大河内は、厚生省・労働省の何らかの施策に協力している。労働省労政局の業務にかなり本格的にかかわっていたと推測できる一連の史料群が残されており、収録された。また、既述の社会保障制度審議会の関係資料も一部収録されている。様々な労働組合関連の資料も、今まで十分に活用されてこなかったもので、貴重である。また、大河内は、文部省作成の教科書『民主主義』の執筆にもかかわっており、その関連資料が残されているのも興味深い。

面白いのは沖縄関連の資料である。1962 年、当時の早稲田大学総長であった大濱信泉は、前東大総長の茅誠司や大河内とともに「沖縄問題を話し合う会」を結成した。1964 年には

この会を「沖縄問題解決促進協議会」へと発展させ、佐藤栄作首相の沖縄訪問（1965 年）に先駆けて世論を喚起するなど、沖縄の本土復帰へ大きく貢献した。その過程で入手した資料が残されている（関連する論考に、拙稿「大河内一男の沖縄訪問（1965 年 1 月）とその周辺ー「大東文化大学図書館　大河内文庫原史料の部」所収の関係史料紹介を兼ねてー」『国際比較政治研究』第 32 号、2023 年)。

他に、週休二日制導入に関する資料、大学教育関連資料を収めた。

こうした記録は、大河内の実に幅広い活動領域の存在を明らかにするものである。同時に、彼の学者として、あるいは有識者としての高い能力も示唆されている。彼が戦争に深くかかわったこと、また大学経営者としてのリーダーシップにある種の弱さがあったという事実を認めたうえで、かつてこうした幅広い活躍をした知識人が存在したことを、現在のわれわれがどのように評価するのかが問われている。

これらは様々な専門分野からの利活用が可能であろう。また、「オンライン版　大河内一男関係資料」をきっかけに、大東文化大学図書館が有する大河内文庫そのものが改めて注目を浴びる場面も出てくるだろう。J-DAC の近現代史料データベースに、その一部が収められたことは、こうした理由から整理者として大変喜ばしいことである。

最後に、この間、陰に陽に筆者らを支えてくださった大東文化大学図書館の歴代の館長の皆様、課員、特に今回の刊行に種々ご尽力いただいた宮瀧交二館長と清水朗部長に、心からの感謝を申し上げ、結びとしたい。